

料を閲読したり、それらを編集する権利をもっていなかったからである。新しい歴史観を学習することは別として、我々がまっさきにぶつかった困難は確実な拠るべき資料を搜集することであった。フランス支配下にあつてベトナム革命史の資料はすべて秘密資料であつたからである。」

かつて植民地であつた国々の歴史家が、多かれ少なかれ抱かざるをえない共通の苦しみといえようが、これを克服して一つの成果はあげるまでまだ相当の時日を要するだろう。

また、ナショナリズムの昂まりが、歴史的な事実を解釈するにあたつて一つの阻害要因となることがないとも言いきれない。

すでに史料の国際的な交流という点についてすらナショナリズムの壁は破られていないという話もきいている。

第三の困難は現地語を駆使してその国の歴史・文化にアプローチすることのできる研究者が現在きわめて乏しいという

ことである。このような状況を考えた時に東南アジア史を書くことの難かしさを我々は痛感せざるを得ない。著者河部教授ははじめ西洋史学者としてドイツ近世史を専攻し、後東南アジア史の研究に転じタイのチュラロンコン大学など東南アジア各地を舞台に研究活動が続けられ、現在東京外語大学のアジア・アフリカ言語文化研究所教授の職にある。

この略歴が示すように現地を理解し、欧米の文献を駆使し、東南アジア史という新しい領域を敍するに氏が最も適した学者であることは異論があるまい。

著者の現地における体験は本書の中で屢々述べられており、多くのエピソードとともに本書を読み易いものとしている。本文中に挿入された地図、年表、写真も豊富で親切である。個々の内容について紹介する紙幅がないので本書のもつ意義というものを解説したにすぎないが、個々の歴史事実についての創意ある見解も展開されており、専門家はもちろん一般読者にとっても東南アジアを考え

る上で示唆される点が多いと思われる。

最近、同地域の在住日本人や旅行者がエコノミック・アニマルとして現地人の顰蹙をかっていることが新聞や雑誌に散見するようになった。筆者も同地の中国人から日本人の行動原理は「金と色」だけですよとよきかされた。

このような非難も結局は現地の文化、伝統、ナショナリズムに対する日本人の無理解に由来するといえるだろう。これらの理解をたすける上で本書の果す役割は大きいであろう。河出書房 昭和四十四年十月十五日刊 定価五八〇円

中村敏雄著

「近代スポーツ批判」

甲斐博

最近のテレビ局はかなりの時間をスポーツ番組の放送にあてている。スポーツファンがテレビの前に陣取って、ブラウ

ン管に映るゲームのなりゆきに一喜一憂する姿を目にするのは週末に限らない。スポーツ新聞や雑誌を片手にかなり遠方の競技場までスポーツを見に出かける人も多い。日本には「みるスポーツ」ファンは随分と多いようである。ところが実際にスポーツをやっている人は果してどのくらいいるであろうか。一般社会人の休日の過ごし方をみると、「テレビ、ラジオ、新聞をみて過ごす」が圧倒的に多く、次いで「ごろ寝や休息」「読書」「映画」「雑談」等である。スポーツをやる」という人はまことに少い。「みるスポーツファン」は遙かに少いのが実状のようである。

スポーツはみたり聞いたりするよりやった方がいいとは誰もが考えている。しかし実状はそうではない。スポーツは一部少数の選手がやるものとなり、一般大衆は自らスポーツを行って楽しむことを忘れているようにみえる。どうしてそうなってしまったのか。どうすれば誰でもやって楽しめるスポーツとなるか。問

題の多いスポーツの現状をいろいろな面から追求し、解決の道をみいだそうとこころみたのが本書である。

近代スポーツ批判は、第一章 スポーツと競争、第二章、スポーツとルール、第三章、スポーツと技術、第四章、スポーツとアマチュアリズム、第五章、スポーツと政治、第六章、スポーツと人間の六章からなり、附録として故丹下保夫氏の「戦後体育史」を転載している。

第一章では、スポーツの本質である競争とそこから生ずる人間疎外の問題を批判する。スポーツは人間がつくり出した文化の一つであり、それは生活を豊かにし仲間意識を高めあすへの希望を日々新たにする筈のものであった。しかし現実にはその期待とは正反対の現象がおこっているのはなぜか。スポーツの発生とその社会的背景から本質をただし近代社会のブルジョワジーによって創造されたスポーツはそのままではもはや現代人の要求にはこたえることができなくなっていることを明らかにしている。

第二章はスポーツ発展の方向性に対す

る批判である。スポーツはそのいずれをとり上げても必ず変化発展の歴史をもっており、具体的にはルールの変更によってよくあらわれている。それはより高度な技術水準で勝敗を争う方向に進められてきた。このことは必然的に多くの人がスポーツを行うことを困難にし、一部少数の選手が行うスポーツとなり、ショウ化し、プロ化を促進した。このようなスポーツを現代人の手に引きもどすには、まずいまあるスポーツルールの中で不合理と思われるものを見いだし、その変更に着手すべきであると述べている。

第三章では、人間性を無視した従来の技術指導体系を批判し、新しい練習法を提示している。元来スポーツは身体的に欠陥さえなければ誰でも楽しめるはずのものである。日本という狭い国土の中でスポーツが好きだと答える人は非常に多いにもかかわらず、キチンとした指導を受けた人は思いの外少く自己流でうまくなった人が多い。しかし更に多いのはスポーツは学生時代だけでその後は殆んどやっていないという人や他人のやるのを

みているという人である。どうしてそういう人が増えてしまったのか、技術指導体系に欠陥があるからである。勝つためのスポーツ、そのための練習に人間をあてはめようとする従来の指導体系を改め、人間を大切にしたい練習法を考えられなければならない。ここではバレーボールと水泳を例にとり、だれもがうまくなれる技術指導法を試案として提示している。また技術に上達するための要点としてタイミングとプレーの予測をあげ、レクリエーション活動として行う程度のスポーツでは何よりもこの二つが重要であるとしている。

第四章では従来の古典的アマチュアリズムを批判し、未来のアマチュアリズムのあり方を述べる。現在アマチュアリズムは経済的な問題をはじめ多くの問題をかかえ非常に錯綜した状態におちいつている。これはスポーツが創造発展の過程において社会的な身分、階級に基づく差別意識をもちこんだ結果にほかならない。スポーツが大衆化という方向性をもつて発展していく時、この古典的な現在

のアマチュアリズムは大きな障害であり、新しいアマチュアリズムの確立が必要である。未来のアマチュアリズムはそれを今日あることばで表現すれば「ステートアマチュア」と呼ばれるものとなるうと言う。

第五章ではスポーツと政治のかかわり合いと体力づくりの本質を批判している。一般にはスポーツは政治と全くはなれて存在すると考えられているが、現実はそのようではない。政治はスポーツを援助することによって大いに利用し、スポーツもまた政治に積極的に介入していることを国名問題や人種差別問題などいくつかの例をあげて明らかにしている。更に政治とマスコミが助長している「体力づくり」は人間を一個の物としてとらえる人間観から発しているもので、これは人間が生きていく上に欠かすことのできない重要な文化活動の一つとしてとらえていこうとする新しい運動文化の創造に逆行するものである。

第六章は近代スポーツ批判の結論である。スポーツを行う際にみられる解禁止

現象と人間形成との関係、スポーツに伴う喜びの質の向上について述べ、最後に、「スポーツが国民すべてのものになるには、ひま・金・技術・仲間、そして精神的な解放が必要である。これらは座っていて手に入るものではなく、要求し獲得していくものである。ひとりの努力でなく、スポーツを欲するものが集団の権利として要求したたかいたり、やがて誰でもが喜びを味わえるようなスポーツに変革していく努力と併行して、国民への浸透をはかり、国民的な要求にまで拡大していく必要がある。スポーツをどのように変革していけば、より多くの国民が早く喜びを味わえるようになり、より質の高い喜びを体感できるようにするかという課題こそがスポーツを変革し新しい運動文化の創造に発展していくものである」と結んでいる。

著者はスポーツを国民みんなの手に、そしてスポーツは誰でも楽しめるものであるという確信のもとに、スポーツの現状に批判のメスを入れ、これを変革して新しい運動文化を創造すべきであること

を提唱している。我々が改めてスポーツ
 というものを見直す時、この批判書が示
 唆するところには考えさせられる点が多
 い。新しい社会のない手として勉学に
 励む学生諸君にも一読をすすめたい。

昭和四十三年九月

二〇〇円

三省堂刊

執筆者紹介

上原 聡	小川 晃	朝倉 哲夫	野口 彦治	大久保 堅二	森 泰吉	大沢 一雄	甲斐 博	宮原 義友	安東 久幸
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
横浜商科大学教授	講師	講師	教授	教授	教授	助教授	講師	講師	講師